

源氏物語の女性たち

相馬 大

REGULUS LIBRARY



第三文明社

〔著 者〕

相馬 大（そうま・だい）

1926年 長野県に生れる。本名＝出川光治。

立命館大学文学部卒業。詩人・エッセイスト。

聖母女学院短期大学教授。

日本詩人クラブ、日本ペンクラブ等に所属。

主要著書 「花の文化史」「花万葉集」「花平家物語」

「花源氏物語」「わらべ唄」

「京の古道」「北山杉の里」

詩集「西陣」「あおひえ」「家」ほか。

源氏物語の女性たち

レグルス文庫 185

1990年4月10日 初版第1刷発行

著者© 相馬 大

発行者 栗生一郎

装幀者 栃折久美子

発行所 株式会社 第三文明社

東京都千代田区三崎町1-1-9

郵便番号 101 電話 03(294)8731(代)

振替口座 東京5-117823

印刷所 明和印刷株式会社

¥1700(680)

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

ISBN4-476-01185-3

1990 Printed in Japan

源氏物語の女性たち

相馬 大



第三文明社 レグルス文庫185

目次

その一	桐壺更衣	11
その二	藤壺の登場	15
その三	常夏之女	20
その四	空蟬	24
その五	夕顔之女	28
その六	若草	32
その七	若紫	36
その八	二人の祖母	41
その九	末摘花	45
その十	弘徽殿女御	49

その十一	冷静な靱負命婦	53
その十二	軒端の萩	57
その十三	藤壺宮の決意	61
その十四	若き日の葵上	66
その十五	祖母貴婦人	70
その十六	なやみの朧月夜	74
その十七	入りぬる磯の女君と	79
その十八	葵上のけぶりに	83
その十九	紫上にとなり	87
その二十	野宮の虫	91
その二一	雷鳴のいたずら	96
その二二	こころの女	100

その二三	有明の月に……………	104
その二四	「近まさり」する女……………	108
その二五	永遠の恋人として……………	112
その二六	船上の涙……………	116
その二七	六条御息所の死……………	120
その二八	藪原の孤独……………	125
その二九	「ものづつみ」の魅力……………	129
その三十	「そのかみの心」に……………	133
その三一	「なほ心ばせある女」……………	137
その三二	尼の深い祈り……………	141
その三三	子を思う道に……………	145
その三四	ともしび消え入る……………	150

その三五	あえて世づかぬ女	154
その三六	雲居の雁も	158
その三七	母の初音	163
その三八	春と秋の女	167
その三九	姫君の悩み	171
その四十	さがな今姫君	175
その四一	政争に敗れた女	179
その四二	大宮の流れ	184
その四三	女が意志をもつとき	188
その四四	愛のまぼろし	192
その四五	女の業	196
その四六	かげろう	200

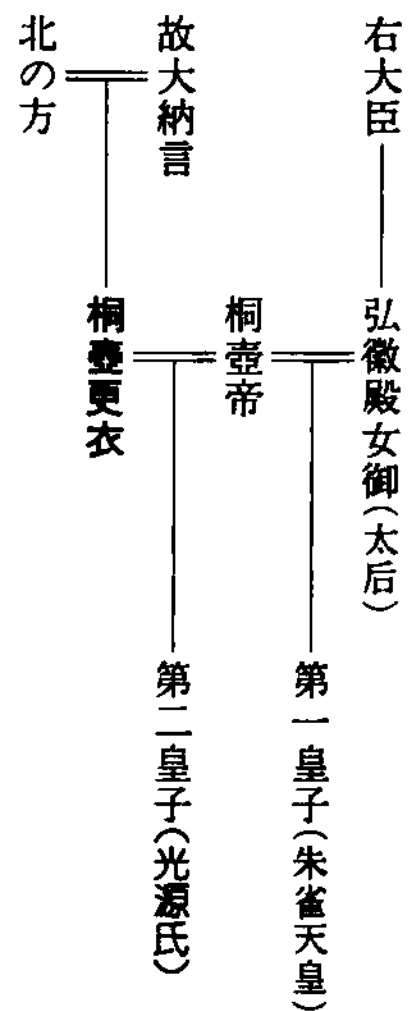
その四七	萩のうわ露……………	204
その四八	おもかげ……………	208
その四九	今めきたる女……………	213
その五十	咲く桜あれば……………	217
その五一	愛の死……………	222
その五二	入道のためしにや……………	226
その五三	隠れた匂い……………	230
その五四	霧のまよい……………	234
その五五	日ぐらしの声……………	238
その五六	忍ぶ草は……………	242
その五七	悲劇の原因……………	247
その五八	無月の形代……………	251

その五九	ただよう小舟に……………	255
その六十	女と不運……………	259
その六一	母へのめざめ……………	264
その六二	揺れ動く魅力……………	268
その六三	輝きのなかへ……………	272
	あとがき……………	276

源氏物語の女性たち

挿絵—桑野むつ子

その一 桐壺更衣



ほのかに、二条大路を、半月が照らしている。影をつくつて、牛車が、東へ進む。台風の過ぎた京の町は、静かであった。しだいに、牛車の影が濃くなっていった。それは、深い京の秋である。虫が鳴いている。

月の光の中で、門がひらき、牛車が入っていく。中門の扉がひらくと、庭の草は乱れ伏して、やかましいほどに虫が鳴いていた。寝殿の前に、牛車が止まり、天皇の使者がおりた。風景は、月光によつて、それは、みずうみの底のようにみえる。そこが、桐壺更衣の二条邸である。三歳の第二皇子、光源氏は、遊びつかれて眠っていた。数え年の三歳、まだ母の死に気づく年齢ではない。祖母の家へ、遊びにきているとしか、思っていない幼さである。

宮城野の 露吹きむすぶ

風の音に 小萩がもとを

思ひこそやれ

——
〈桐壺卷・桐壺天皇〉

天皇は、桐壺更衣の死をみていない。三歳の光源氏と共に、皇居へ帰ってくるような氣持ちでいる。一日も早く、光源氏が、母の喪をすませて、皇居へ帰ってくるようにと、歌と共に便りした。更衣の母は、天皇の心が、よくわかる。更衣の死を知らせるために、更衣の形見として、「御装束一領、御髪上の調度めく物」を、使者に渡した。

かぎりとして 別るるみちの

悲しきに いかまほしきは

命なりけり

——
〈桐壺卷・桐壺更衣〉

天皇は、更衣の匂う形見に、死の現実を知る。夏の暑い日の死から、いつの間か、月にももの思う秋になっている。七日ごとの使いにも、なお、更衣の死を信じきれない天皇に、この秋風、月の光は、更衣の死を現実のものとしてしか、判断しないわけにはいかない。

死ぬときは、一緒にと、常に誓っていたことの虚しさを、月の光が教えていた。

先の歌は、天皇のために、生きていたいと更衣のうたった歌である。二条の邸へ帰る更衣は、もはや、やつのことで生きている。生きたいのは、第二皇子の光源氏のためでもあった。その夜、更衣は死んでいった。天皇は、更衣の死を、知性によって理解しても、感情的に理解することができなかった。

多くの女御も、更衣も、親子兄弟の立身出世のために入内したものである。天皇の皇子出産、それを願っているものばかりである。けれども、桐壺更衣には、立身出世を願う父も兄弟もない。ただ、天皇の愛を信じて入内してきた。この更衣にだけは、政略結婚の要素が、少しもない。その更衣が死ぬとは、天皇には信じられない。二条の邸へ帰るときに、挨拶に来て、ただうつむいていただけである。生きたいという歌も、天皇の耳には聞きとることができなかった。

尋ね行く まぼろしもがな
傳にても 魂のありかを

そこと知るべく

——
〈桐壺卷・桐壺天皇〉

ついに、更衣の形見で、天皇は死をみとめる。どうして、『源氏物語』のはじまりより、桐壺更衣の死という悲しみから、紫式部は描いたのであろう。作者の紫式部は、幼くして、母を失っている。しかし、日記にも、歌集にも、生母のことを書き残していない。継母のことも、何も書いていない。それだけに、『源氏物語』で、母のない子の生きざまを書かないでは、いられなかったと思う。主人公の光源氏をはじめ、むらさきのうえ紫上など、力をそそいで書いた登場人物は、みな母を幼くして失っている。亡母への鎮魂、それが、『源氏物語』の骨格をなしているかのうちにさえ、思えてくるほどである。

この桐壺更衣も、胸の病氣らしく、透きとおるような女性として描かれている。現実離れのした美しい母、それを、現実近づけるために、胸の病にまでしてしまっている。この美しい母のまぼろしを、光源氏は追いつづけていく。そこに、ふじつぼのみや藤壺宮が登場する。その藤壺宮の形代かたしろとして、紫上が登場してくる。しかも、藤壺宮と光源氏との間に生まれてきた冷泉天皇れいぜい、その冷泉天皇の実現のために、藤壺宮と光源氏とは、重たい秘密をかかえて生きていくことになる。

愛のために生きて、短い生涯を閉じていった女性、その桐壺更衣のまぼろしが、『源氏物語』を生みだしていったようである。

その二 藤壺の登場

長い夜が、しだいに明けていき、東山の空が輝きはじめる。長編の物語の夜明けを、この「光り」「輝く」ことによって象徴させていく。桐壺更衣きりつぼのこういの死によって、深い夜は去っていった。

桐壺更衣の姿や顔に、あまりにも、よく似た人物が発見された。それが、先帝の第四皇女である藤壺宮ふじつぼのみやである。桐壺更衣から生まれた第二皇子は、すでに十一歳となっている。母に似るといわれる藤壺は、十六歳で、「げに、御容貌ありさま、あやしきまで」に、母に似ているという。父の桐壺帝も、あれから、八年の歳月を過ごしている。ほかの女御にようごや更衣こういにも、八年の歳月は流れている。後宮こうきゆうの女性たちは、すでに若さを失っている。父の桐壺帝も、そうであった。

